



15
67
4上



門 1 曾 5
第 67
卷 4

筆 此 滿 考 之 四

目 録

○ 鷹 取 村 化 物 分 东 上 村 六 左 水 練 長 見

○ 丹 波 國 猿 岩 分 京 郊 丸 山 清 水 在 後 河 國 足 洗 河 内

○ 三 河 國 潮 盈 虛 分 後 河 國 五 疋 一 鄉

○ 仙 翁 苑 淡 菽 牡 丹 分 繪 像 奇 異

○ 戸 田 流 叙 紙

○ 圖 魔 王 書 狀



夏

四

- 名護屋山三郎不破万作流傳草履打男達
- 約率供奉付米穀江都廻在古今農家
- 夫婦同年八木守
- 三遠兩國町人射御由來之事
- 奥久提造作之時韓檀を堀出りて
- 延宝年中五月廿七日妻石以炎熱乃事

茶のゆくき之四

○世に怪力乱神と傳ふ事と禁るるとも事又附合れ候
 を副言とる友室瓜多ふをんかりにーくありー事
 傳ふ事トきよとあらはし去心徳の比三河吉田町と若
 志のともち高素乃小商人あり此者武家方より
 幕と入張徒負一が吉田の三張個人知を是傳町人
 求りし約一が不個して名古屋今と志一丈溪茶如
 別まは日晡及及び志る人乃茶屋又一山一ぬれふ
 中秋乃名彦おれ名古屋中を此色一る瓜借彦事
 又丈溪と知る付ふるぬがふ池經新乃を名古

屋傳言所一在乃捷徑あり我多業肉をよく去り方
此る瓜多うなりとのみまゝと幸か運とて彼在る人かり
紅しよ鳥取村と云ふよかり小松ありて居るどけさ
ひろき地あり其地人動まば俄に旋風吹来り業肉を
足とめて地よりぐぐり其時若くもるぬもはくまふ
く霧く虚くともりて是をど地よりぬ時よ小松乃あり
其地を丈三に尺徑乃仁まじりぬ丈入る眼のひらりと
百株の積又ひときか歩と来る女ともよよく膀胱
あて地よ伏居るに彼化物程なくと約り程なくあ
人とも幸性か運とてぬたりまより一里外も約り

を術疾もあけて成疾よりたむと吸そくけり
洞此ありよ天物すと怪異乃物ありやと云いまうまの
えけもつらふ中よあらざれば天物其地怪物をじとふ
鳥取村とて化物よあひさす事と信まばそれいふ後之
天物もあつらふ青うらふと都と云ひのらんと後よ
かくて名古屋れ洞屋よ是るぬとて一幕外洞を角
まろよ舎業一向とて後後後痛甚しと云ふの医と招
きとやうの時疫乃脈律やう伏替あまは不はうはと
いふ途中よて化物よをよ事と信まば業と加減して用
ゆまとも強うよ友よ吉田やを色く怒瓜雇いぬ日なら

くるるをうれどもすましく 勢字はよく医老狐引人 腋業
 とれども快よりから次第十三日目を お果より 化物の疫
 病の株をるべしと云ふ

吉田より 日里北東と村とありとあり此村の山六七町
 へ幸文よりありある大花泉ありるサに又大なる谷
 危業本祭儀し是も晴く凌競とありあり飛泉乃
 毒とあり盤淵よりて人妻ゆとれより二より後下へある
 是狐雌滋といふ爰もありて深淵たきとも東と村六左の
 とありありありと列するゆへは此雌滋れ毒と潜りて貞と
 捕享保中あり日此ありあり年魚狐捕んと云ふことあり

大に逆浪口へ左増く又居きまに淵乃中より大なる
 美年湧出し角成 又と叫くと吼く六左のと同かけ
 来り六左の別強れ共むともあり何も持するゆへあり
 とれりくとり有るよりぬ時よ忽殺熱し澆治とと嗜
 て三日目にお果より深淵より大鐘をとも出へきよ年れ出
 ころと高き也淵乃至靈なるべし又此東と村と新成と
 のる又一柳田村と云あり此村の川筋よ今の大川の時時鞍が淵と
 て川筋第一に深淵あり世俗此淵と絶官城なりと云
 傳ふ彼六左の者よ此淵へ潜く渙瀧とありは終りよ此水
 危何ともありとよりい只あり寒冷をうりかり深さ七町

二尺ありと云ふ又河あり十尋より深き淵をたれり此
 ようまより深き河あり息切淵を幸たりがごとくあり
 海あり廿尋も三十尋もある所あり海と川とい遠ひ十六六
 尋潜ても息切と云ふ
 往古允恭帝流流碇は漢獵しなすると云ふ海中は光物
 あつと一向獵る一因くを因乃獵人を召て海屋り
 入く光物を見存あるべき勅ありと云ふとて深淵に
 入は勅を急むる者あり一時は男狭と云ふ海人其妻を
 とし又田所と下さきこ入るごと昔ひふ男の繩を獲て
 付海屋より飛入度えく去て大きなる場と捕りて候

ひ大と二尺に方丈珠あり勢即れ大きこと光赫を
 たり此珠とい所の女神乃社にありと云ふ男狭を
 息切設しと云ふを塚海屋ありを繩を獲つけ
 ると六十尋ありと云ふ

自見神曰海乃海士と此を作らるりのなり
 又強志和尙庵より渡初乃時佛舍利教を授けり
 たりといふと彦彦乃洋と七龍宮を奉りてと云ふ
 瑞書に載と此の石表何ぞ海屋に龍宮とて宮
 城ありんや法華經の龍神を奉りての王に奉り
 たり

又曰海産宮城と云ふ事ととも中ノ奇怪の事ありて凡波乃難とくして船所止め怪と事あり
海にも怪事あり

○丹波國桑田ノ孫思とて其美れ思ふり皆國の
と死洲思れとつと云ふ事と事と此所瓜をれい
らど石塚とるとつと事地中いりり人の急氣
多る中つぬ

系丸と云ふ者乃法のとは法後上人若無法和者乃
徑地より青蓮院關伽乃ふふと此法のと汲やれ
汲もの甲冑を著して汲拾式やうと云ふ事急氣

防ぐゆかり

駿河國又一村乃男女工くを是れ犯とあり
此所より縁組して来る者も自ら足指肥る

按此村池のまうとあり其水乃甚しきと云く此
き痛あつと又むらむら云々此所より縁
組して来る者も指を是をあらふが身痛る事
是乃痛ましくとつと云ふ事此所は洗村と
いふかり

○三河國に比るるといふ事と海産此の隙と一
き地色乃村かり松林と南冬とつと寺の境内

方丈町をうりり池ありけ池あり海中游の邊盛ると時
 刻と一一滴もあかくして于後とせられがそらくと
 涌出て後乃てころよの邊とてえ乃池ありとがる
 此寺を代西の里とるまようり池を田とらうて今
 あり池ありの盛盛むうりあうらど

駿河下野とらふ一村むうり療療乃患ふ
 是もそ地と門の突たるまかうけて自然と疾を
 發し自然と病發免るる會歎茶本れ異むり
 のと又曰し

今茶苑と勞秋殿とらあり此苑治西院誠仙翁茶

より如く仙翁苑とらむなり

修智乃溪歎と二見乃浦三は村の南ありありの
 若とる遠ひて行茶むりとらうら

東武も行茶の若あり宝曆又多れ秋東武より
 如後亭を涉とらふ御土素り又七日を隔日松
 也よりありふ流乃細流とよける若悉く行茶あり
 主前後あり田ま若生りて較多ありとも皆若乃
 若かりあり涉曰東武行茶の若生とらありその
 大地た一方より風候ある此苑もふのわうり一方
 より風のあるる行茶むりなりと皆若れ若之

かくれごとく茶の風よきさうふゆふ人れ話よ
風流よきと傳言らまうも珍なりとてそを月
の影とよむ也

秋の日の暮れぬ川とありまを天龍川に
流れて流れて乃を流るる川とよふ村の
所より遠くなるふのころよふ本二本ありて見
渡ると一寺と一丸に圍一寺と二圍なりて初
花は赤く其色白く種尺とありて見ゆか
るを物とく牡丹なりとつるを花は牡丹の
出合は花の葉と拾ひたり牡丹なりとて
肉裏

の如くそを付の花檀なりとて俗に傳り
る傳ふは肉裏なりとて人き習ふ
物も字有との事もなく死亡の老ありて
じう、親愛と人自西の阿弥陀の像
て葬と今も形勢もはるるゆきて
を洞窟に法印梅の尾とゆきて
二種の像成すとよむは後て
此像成るやとらるるなりとて
あなふも強くと種をと掃落
心懸く念圓が塚とて今も
西像もある事

四八

自見飛白むう良秀との函共あり時己居
念火又の罹もろく志うとも是故ありとも悲し
まじ人よのふと居室を射ありと造るく此火其よ
周く不初の大老れ跡と懐りぬりと懐ひくとも也
人の物教あまなくくそ猶も却て名書あるれ縁
ととわらう志うとも悪人よを身を杖とまふ
兼阿あり

戸田流の巻流北達人よ為永全左のよと云流人の
江都西久保後飯村とよ候しりりか此借宅一何
志らど候く兼と懐しりり候よ為永のよの楽入る

くそをホらドいへる物狸乃有るからんとゆわく
比々寛永十一年五月十日の夜此事とくや常
乃森而よい己が附方とく梅くま身に行隅と待たる
あやまこと又又よ及ぶはぬく戸乃あく者もまきく
まろりの瓜石をば取眼星れとくそ形何とも人分
ぬ形務ともまきき侍たり彼度次女乃と瓜飛ぶ馳
つ狸よとゆさやと吹く色ばまごえと犯物係も瓜
腹く竹巢乃よれり人色る有瓜返うけて朝色色ハ難
ろく二の左刀よて仕るなりと深くと取指と突
立灯を擲くんれば哉年歴するとも志れざる右狸之

化物所仕多うりといへる者もよき所を尋ねた事多し
あつち始終を尋ねておぼえおぼえの共にも流る侍多
といへる者もよき所を尋ねた事多し
この所此狸位で一月と住るとある者も一此といひ
物乃根瓜結してを安と云んと怪びくる相違承真
糸トてや登十六具船合は狸をぶらさげ徳人の
るほどは返乃徳人群集して徳とる瓜はよの
とくことと登一き市中又狸の位とるや是の心定
概所より実求めて人と惑と係わるべしといへる悪口
一たるゆゑ辰乃刻の肉へ入る此の批刺すま

處の中う又世るよははあうりけ却て安永と唱へら
を付知事よも登ぐてやあひらん位を承へて彼方此
と事いあつた後よと外方とらとむらりまは徳
此人を知る人乃いふいふ者も無法を恨しなるゆゑ
乃こりたるものとせん
○越後と枚乃家老並に山城守兼継と本多氏仲の時
に天皇と御まゝ内乃樋口次郎兼光が素縁して二十二
万石瓜外と文女あつたのむらうを侍致礼舞よまど武
勇も又勝も大無うて風俗言流盾と並るものじ
景勝越後より會はく國替れ時中三室寺を承と

いふ其下人と成致らる共飛斬徑乃来よいかたゆ人う
下人の親類被其死返くならんこと候るに城守は
て五枚銀二十枚と云ふて一夫を以て死に候るに堪ふと
と云きくも中く取らば何分被其死返くならん
んと候るに城守は来よ中分て其れを被其死返く
一守とて自ら去國へ出所江人と云ふくあつた
りきども其れを其れに城守が口より云ふもかろ其れ久
也とあつた人は是れ及びいふ久と云ふ組一眞達一
よびよきと人なりと云ふく被其死返く伯父と甥と
三人間磨れ聽くまつり被其死返く其れを三人

と其れを乃指し斬罪として被其れを建る
本得共責人とも一守を被其れに三宮寺に其れ
不効に仕合ふと其れに親類被其死返く其れと
候る中分て其れに三人運ふと云ふ被其死返く
て其れを其れに候る

享長二年二月七日 並に城守兼進判

圖磨大王

眞實御幸所被其

右れづく書封を札をたてしに國中一と云ふ所の
るしと云ふ

長刀をぬてむろさしかきと見よもかぬまはかり
 ずしと傳おき切らうして終に捨どめりなりて死
 と又不破万作と秀次云ふ姓ふして生害れり追
 後を切らり

世に名古屋と不破が苦慮ありとて後あり粗き其
 形りつら星狐孝し歎ふ不破侍左のときり信り
 かり金く万作かりて三筋万作花石田三波が小姓
 名久基三人其時天下此三英雄なり信後乃茶
 履お授あり

え録乃此あり家乃後室本櫻所守田勘録が其在り

又ねえ幼きしと世るうとを粗き後孝と通ととい
 と其家来し不破権左の星狐使付おれし殊といふ
 後室用いたまふと不破星狐いりて其居より切る
 しとありて後室此来るはるるに握ちりう教をえ付て
 隠道らしとてまより権左よりぞいぬぬと後孝は
 乃かりとありとていふと懐り其言中村侍九筋が粗
 き刀れとて握ちりうありたりとて侍九筋と道
 さしと尋基へつる侍九筋早く述て樂屋へ入又物の
 大勢足し終るは際く其日を短くも止め握ちりうは
 いりびくやへ入らんとするも花舟と三筋とのし後孝握

ちのつとも免れぬ後作をうらむも仇おるはまざる何
系考るそへは堪忍下さるべし私何分れは抄擲も
あひしべし一果うそは後と居るわらと下さるべしとむき
うて下し又付握ちるいつりぬあすり苦後とぬ花あが死
とまんくはあたる足より被後室さあ人のたすむと其後
花井女三所若廢しておきてる事跡急よと人ともとき
中うそくもひ分て狂言は仕組日名がらば不破握ちるつて
中うそく不破信たつとして名古屋ふ三所う名れ女三
前ふ無う分て名組ふ三所が侍たつと苦後してお
まは狂言として握ちるは面苗の仕人しとさつり其狂言

大とよあさつて世信むら名古屋が苦後おとりのてえ
やとむり
兼あれはほろふ三浦何来とつ人甚別強き意の
考うそ若神のうそく世とよ唱へらとよ其名古屋と
つ男他とつやぐれは皆音を風とて肩とて風分切
信考乃既とまきし一人たり此人より始て今もは
都強社乃あれは名古屋風とつ来あり不破名古屋
う花英とま似る男存違なりとら
○突永れ紗幸よ伝巻乃中皆長く後夜狂歌急し
はまは洪園乃人よかむり夜系巻都あまの侍達人

いひ初よりより来今より強國とも風流の人
とびだてりものころひらけり

は九年より伝奉れ来穀始ては戸一戸も今も三分一
の粟なり其は伝奉りて金をまう付て七五の年経
とうや今の金を歩み六身程乃より一粟も大國にて
文武と古と家教十代はきて由然ある者ありむ
か九府別友義経飛夷海にたれた船中此糧米常用
院文とお供へり百艘の船今より孫割絶なく胃(あ)
より一粟保の比風ありりたり彼義経飛夷より
鞆鞆(酒)り其子孫法金園乃准帝章帝よりたりへ

文武兼修乃良ぬりて大將軍に任じ北方に押し
率金園乃史又伴やうとあり

彼登園形は海をふこを衆とるよ者の居るに九百
年来大兵もなく古代乃より今もはくらく人を
同出度茶やうり

を長中泉に相場をききとる者まぬもよ八年八案
つて去り年又れ去八本れ守りて出とまぬ一紙よま
をならし書して彼方へ送るより世もまぬは年い
急務大事とるもかく去事保て人乃よりむ
て之に俗従は泥るうらむ

世に武名業あり所人高貴乃利國分りて後世と
とるこれ恒の産なり其他業は絶力ありてこれくの
於處とあり事なり去りてを二支國に兩人を多く
常と射術とありしに智慣事由來あり徑前元龜三
年去甲武田信玄を死し出張し不と攻撃し
夫より三死しお越吉田乃城を發州府吉田の城に
沼井左衛門次守り居りて五務ありて難拒城殆
幾しと死し北士村十右衛門系政とありて此りの
元法長稱系とありて後乃仕りて厭礼虐後死し去て
石塚元吉田よ来て徑と此れ射術と達しとをこ乃

乃よりれ多子大勢あり城免きよりて彼多子乃
大勢に是は飽海に又出てりやき放矢如雨脚依り甲
兵陣命共居多しりて碎易し信玄を又振旅し
て飯甲列右次甚感甚あり此由來を射術と勵と
云々又懸は氏西甚乃武將威状記及び新兼生集
多し載記とあり後陽の大守他田武彦守利隆と
重臣番大膳景次り十右衛門也兄多たよ英傑之士
也か乃十右衛門を林自見子が祖先也友よ其書彼家
今於家系と

○玄乃治中其死を撰造他の射地と堀り石れ轉礎と堀

出でる蓋阿部秀樹が推と書付あり用と云はれはた刀
一振と晒取あり白灰と燃てらうとやいとたり蓋と
てまはらるる蓋と云ふ人不知にてありてありてありて

○延安に身辰八月廿七日奥に岩城平内後徳此日蓋九
時布り八つ時をすを突熱踏く病人と死しをたも
多く疎うり病人と云ふと汲後一右て漸く助命と
此布より二里振の村方と云はれ多うなりしとのふ蓋不
二限りかくれとくたういりうる幸々突熱の激てけ
不より發したるからんと云ふ一幸幸なり
三河吉田藩並西の吉に帝とて五能乃咄方共あり元尾取

名古屋れおなりしが親教もたかくそ方外作業と
まらむと云く浪浪伶俜て吉田人ある此者二條線五
て巧みなり友と云ふありのよりあひ指箋町と小店
と帰る飯米名もわくが帰るて差蓋より只二味と
福瓜の心事ありて一幸層なきも龜なりと
物々と突條年中おひてお墨ぬりよりおねて乃
放遊少人法及を名一取もなきまて一強めなき
も二一柱と云ふありのどもあつたり福瓜と云ふ人
それへ細き紙の幟とありら之甚幟は花女乃湯あや
あついと白くくたうたる二條線教弓尺八を踊り

口尻を胤ひ葬送の場へあつても教十人花居て躍り
それより大狐うけほのり帰まらう右今珍發葬送火
此言え物群とるこか乃者幸名とばふほして左
又ダブウとほらうそれゆへ躍りまこれおのま
と南無阿弥ダブウと網て二味線と合せらう世裏
互双の事なり

○玄享保中西三河の中村と小兒お果葬所入送り
て院より大狐うけし其伯母一人狐見在のためと
疎り居てか乃嶽とたよりを出入り喰らひ乃者
是狐より村へ降り此より降りればそれより教

十人持狐お葬所入りしよかの女凌競教付とむ
人のうと飛越ふへ入り方志をど此伯母王日凶惡
乃然がりしよらうて魔の入りあうなるやうと
又及ふ若あつと其惡靈と男い法名狐授く
鬼巻妙轉と号と

天御十四夜
筆此海、卷之四終

天保十四年 癸卯 九月 澣坂

大阪 藤屋善七

京都 山城屋佐兵衛

大阪 藤屋禹三郎

書

林

Handwritten notes and a checkmark in the bottom left corner of the left page.

